日本におけるトーマス・マン受容

—生誕100年までのその作品の研究と翻訳の鏡にうつして—

堀　内　泰　紀

はじめに

1975年に生誕100年を迎え、来年はやくも没後40年になるドイツの作家トーマス・マンは、我が国においても最もよく知られた外国人作家の一人であることは疑いないだろう。生誕100年を機に、マンの遺志に従って日の目を見た『トーマス・マン日記』(Thomas Mann : *Tagebücher*) も1979年から公刊され始めた。しかし、編集に当たっていた、生前のマンとも親交のあったペーター・デ・メンデルスゾーン (Peter de Mendelssohn) が1980年代初頭に亡くなったため、5巻までの刊行で一時中断を余儀なくされた。その後、世界的なマン研究者ペーター・イエンス (Peter Jens) 夫人インゲ (Inge) の手によって精力的な編集が続けられた結果、昨年初冬までにようやく1952年の終わりまでのものが公刊され、残すところマンの死までの2年半余りとなっている。来年には全10巻の完結が見込まれている。

マン自らの手によって「文学的価値なし」と上書きされた封に納められていたこの『日記』は、しかし世界中のマン研究者にとっては、マンの日常や心の内を知るうえで興味が尽きない事実を次々と知らせてくれるものだった。『日記』の公刊によって、マン研究はまた新たな段階に入ったと言っても過言ではない。とりわけ、マンの男色傾向やマン文学におけるエロスの問題など、それは従来あまり顧慮されてこなかった視点も持つに至っており、我が国においても毎年数多くの研究論文が発表されている。またマンは評論でも、小説作品に優とも劣らない質と量の著作を残しているが、それらのうち重要なものは、数年前から徐々に注釈付で文庫本でも読めるようになってきた。

そこで本小論では、ひとまず、『日記』が日の目を見た、マン生誕100年に当

たる1975年までの我が国におけるマン受容の実情を、マンの小説作品の研究と翻訳に照らして考察することにしたい。それ以後今日に至るまでは、来年のマン没後40年を待って、いずれ稿を改めたい。

以下、戦前、戦中（二つの区分）、戦後に時代区分を設定し、受容と時代状況との緊密な連関を、具体的な例を提示することによって明らかにしながら論を進めることにする。

Ⅰ．第二次世界大戦前（1904年～1932年）

1904年12月、著名な英文学者の厨川白村（1880～1923）は、1895年から刊行されているアカデミックな色彩の強い月間文学誌『帝国文学』で、『獨逸最近の戯曲小説』という表題で、二人の新進作家エードアルト・カイザーリング（Eduard Keyserling）とトーマス・マンについての評論を発表した。そこで彼は、わずか１年前に本国ドイツで刊行されたばかりの短篇小説集『トリスタン』（*Tristan*）について言及している。そのことによって、トーマス・マンの名がはじめて我が国に紹介されたと考えられる。

その後1910年からトーマス・マンとその作品（特に若干の初期短篇）は、翻訳を通じ徐々にではあるが、我が国の一般読者層にもお目見えするようになった。しかし、それらについての本格的な研究にはまだ手がつけられてはいなかった。

1927年、日野捷郎（後の実吉捷郎）はマンの短篇小説、『幻滅』（*Enttäuschung*）から『なぐり合い』（*Wie Jappe und Do Escobar sich prügelten*）までの19作品を翻訳した。これらの翻訳は岩波書店から３巻本として刊行されたが、３年後の1930年には、うち２巻が岩波文庫に入れられた。第３巻が文庫本で発売になったのは、ようやく1935年になってからの事だった。日本の読者の間に、トーマス・マンの名前と作品がはじめてより広範に知れ亙ったのは、おそらくこの翻訳を通してだろう。

辻邦生と北杜夫の対談集（『若き日と文学と』）からも知りうるように、少なくとも日本を代表するこの二人の作家は、実吉捷郎の一連の翻訳から終生消し難い深い影響を受けていると言える。

この二人は、旧制松本高校在学中の18歳の頃、熱烈にトーマス・マンに読み耽っている。しかし、二人のトーマス・マンへの興味や関心は、やがて全く異なった性質を持つようになる。北杜夫にとっては、トーマス・マンの初期短篇の世界を包み込んでいる北ドイツの憂愁に満ちた雰囲気が、何物にも代え難い魅惑だった。一方、辻邦生のトーマス・マンへの関り方は、徐々に小説の方法論的なものに変わって行った。1957年秋から61年早春までのパリ留学時代、辻はマンの処女長篇でノーベル賞受賞作『ブッデンブローク家の人びと』（*Buddenbrooks*）を原語で読破し、その第一部の全文を一文ずつカードに書き写す事を通じて、トーマス・マンの小説の叙述法にひそむ固有の特徴を、徹底的に研究し尽くしている。

マンは1929年にノーベル文学賞を受賞するが、それにともない我が国でも急速に知名度が高まることになった。そして1931年には、当時の日本のドイツ文学界を代表するゲルマニストの一人だった成瀬無極によって、受賞作『ブッデンブローク家の人びと』が翻訳された。それによってトーマス・マンははじめて、短篇小説作家としてではなく、19世紀の伝統のなかにいる重要な長篇小説作家として、日本の我々の眼前に姿を見せたのだった。

Ⅱ．第三帝国時代（1933年～1945年）

1）第一期（1933年～1940年）

1934年から35年には、我が国の東西の帝国大学のドイツ文学科に席を置く有志によって、同人誌『エルンテ』（東京帝大）と『カスターニエン』（京都帝大）が発刊され、それぞれの誌上でかなりの数の翻訳が発表されたり、トーマス・マン特集が組まれたりした。また文芸誌『浪漫古典』（昭和書房）でもマンの特集が組まれ、1930年代半ば頃にトーマス・マン文学の受容は、研究面でも、そして翻訳のお蔭で一般の読書界でも、第一次の全盛期を迎えたと言っても過言ではない。なお、30年代前半のトーマス・マン研究と紹介は、主として小説中心になされていた。そしてこの時期の研究傾向には、二つの主流が認められる。

東京帝大派：とりわけ当時のドイツ本国のドイツ文学界の重鎮、フリッツ・

シュトリッヒ（Fritz Strich）を範にした文芸学の方法論の影響下にあって、トーマス・マン研究は、謂わば形而上学的になされた。麻生種衛の論文『トーマス・マンの世界』は、その模範的成果だと言えよう。その論中で麻生は、深い内的関心を持って、「デカダンス」から「生への奉仕」に至るトーマス・マンの精神の変容を追究している。

京都帝大派：研究者各自が主観的な、自由なアプローチで、ヒューマニズムの作家トーマス・マンに感情移入し、マンに理解を示しながら、謂わばマンとの対話を試みていると言えよう。その典型的な例としては、『カスターニエン』誌上に『亡命中の作家』と題して発表された、和田洋一のエッセイ・シリーズが挙げられる。その中で和田は、当時の政治情況に対するマンのかかわりを的確に描き出すと同時に、ファシズムの脅威に対するマンの確固たる態度に信頼を寄せている。

ヒトラーが首相となった1933年以来すでに、ナチスに与する文芸学のイデオロギーの影響を被った一群の日本のゲルマニストは、トーマス・マン文学に対して批判的な立場をとるようになっていた。高橋健二の場合が、この偏向したドイツ文学研究の代表的な例だったと言えるだろう。高橋は、トーマス・マン文学を、神経過敏で、退廃的で、いかがわしいものとみなしていた。

30年代後半にはいると、亡命、ドイツ国内の財産及び国籍剥奪、そしてボン大学の名誉博士号の撤回などによって、マンの立場ももはや明確になる。すなわち、ナチスと公然と袂を分かつ彼の言動が文学作品そのものよりも注視され、戦時中の知識人のあり方を示すものとして、盛んに取り上げられ紹介されるようになった。

しかし、1936年の日独防共協定締結、続く38年の日独文化協定締結によって、ドイツの内政が、広範に日本のゲルマニストたちにも影響を及ぼすようになった。そしてナチス文学とナチス文芸学の紹介が、謂わば彼らに義務付けられた形となったため、30年代末頃には、マン研究者は「国賊」と見なされるにも等しい情勢だった。そのため、トーマス・マンの本格的研究に心血を注ごうとした研究者は、戦争終結までの間沈黙を余儀なくさせられた。そのようなことを考えると、戦時のまさに緊迫した情況下、三笠書房が1940年に「トーマス・マ

ン全集」（全18巻、別巻１を予定）の刊行を始めたことは注目に値する。

２）第二期（1941年〜1945年）

しかしながらこの企画も５巻までで翌1941年には強制的に中止に追い込まれ、それ以降終戦まで、トーマス・マンの作品の翻訳出版は全面的に禁止された。研究面でもこの時期は、専らトーマス・マンの作品を「没落の烙印を押されたもの」としてナチス的に声高に誹謗、中傷しているものばかりが目立っている。その中にあって、1944年に発表された高安国世の論文『魔の山』（七丈書店）は、同名の代表作に則して、デカダンスを克服し生への奉仕に至るマンの精神の変容を、マンの政治論『ドイツ共和国について』（*Von Deutscher Republik*）の言葉を援用しながら詳細に論述しており、間もなく息を吹き返すことになる、戦後のマン研究の魁を思わせるものとして極めて興味深いと言えるだろう。

Ⅲ．第二次世界大戦後（1946年〜1975年）

日本の敗戦を契機に情況は大きく変わり、戦時中禁止されていたトーマス・マンの著作の翻訳出版が自由になった1946年から、再びマンの紹介と研究が活発になされるようになった。数多くの新しい翻訳が刊行されたが、1948年まではマンが第三帝国時代に物したナチス攻撃のエッセイが翻訳と研究の中心を占めていた。わけても、ジャーナリズム界では、ナチスに対して取り続けたマンの批判的姿勢を称揚し、マンを知識人の模範、ヒューマニズムの旗手、民主主義の教師として紹介する傾向が強かった。その背景において、1946年に刊行された大山定一の『作家の歩みについて—トオマス・マン覚書—』（甲文社）は瞠目すべきものと言える。マンに対する親近感を綴った７篇のエッセイで、大山は自らの詩的感受性の光に照らして、ヒューマニスト、トーマス・マンの作家としての相貌を見事な直感でとらえている。

1947年５月には日本独文学会が設立された。同年10月に発刊された機関誌『独逸文学』第一号も、「ヒューマニズム特集」を組んでいる。言うまでもなく、そこでトーマス・マンも、この観点からかなりの数の研究者によって評価され論じられている。

1949年に、我が国初のマンに関するまとまった単行本『トーマス・マン』（世界評論社）が出版された。その著者で、我が国初のトーマス・マン専門家佐藤晃一は、ドイツの文学的伝統のなかで、ヒューマニズムの代表者としてのトーマス・マンの全体像を描き出すことを試みている。

同じ頃出版された高橋義孝の評論集『マン・ヘッセ・カロッサ』（南北書園）には、5篇のマンに関するエッセイが収められている。そこでの高橋の立場は、佐藤のそれとは対極にあるもので、高橋は専ら19世紀的作家としてのトーマス・マンの芸術的創作の問題を根本テーマに据え、政治評論は三文文士の書くものとして無視する態度をとっている。

こうして戦後のトーマス・マン研究は、年を重ねるにしたがってその密度を増して行った。その要因としては、昨年暮れまで30年以上の長きに亙って、世界的なトーマス・マン研究家のツューリヒ大学教授、ハンス・ヴィースリング（Hans Wysling）が館長を務めていたツューリヒのスイス連邦工科大学付属トーマス・マン・アルヒーフの活動によって、1960年代末から、とりわけ多くのトーマス・マンの遺稿や創作ノートの類が読めるようになったことがまず第一に挙げられる。そのため今日では、もはやマンは現代の古典的作家として、さまざまな視座からアプローチされるようになっている。その際トーマス・マンの作品の芸術的側面に、ますます研究の重点が置かれているのが目立っている。

1972年には我が国初の『トーマス・マン全集』（全12巻、別巻1、新潮社）が刊行され、一般読者もマンの全小説作品と多くの主要な評論、エッセイを邦訳で読めるようになった。

本論の最後に、我が国のトーマス・マン受容にとって画期的だった出来事のひとつを紹介しておきたい。トーマス・マンの生誕100年を記念して、1975年に阪神ドイツ文学会は「トーマス・マン・シンポージウム」を開催した。その成果として、阪神ドイツ文学会に所属するトーマス・マン研究者たちの寄稿によって、『トーマス・マン文学とパロディー』（片山良展・義則孝夫共編、クヴェレ会）と題する興味深い単行本が出版され、今後より本格的に研究されねばならない分野の指摘がなされている。

おわりに

日本におけるトーマス・マン研究と翻訳の動向は、以上概観してきたように、時代とその社会情況に密接に連関している。日独両国が犯した政治的な過ちが、日本のゲルマニストたちに要請した体制側への協力、ならびにゲルマニストたちのそれへの便乗という事実は、何よりも雄弁にその事を物語っているだろう。

ここで翻訳と研究の関わりを、統計的に見ておきたい。我が国では、トーマス・マンの名前は、短篇小説『トーニオ・クレーゲル』（*Tonio Kröger*）と長篇小説『魔の山』（*Der Zauberberg*）の作者として定着している。しかし、後者は確かに８度も翻訳されており、タイトルこそ良く知られているが、一般に読まれるのは岩波文庫全４巻のうちせいぜい初めの１巻ぐらいではないだろうか。

マンの代表的中篇小説『ヴェニスに死す』（*Der Tod in Venedig*）は、1970年代初頭に映画化された事もあって、70年代に翻訳の数も増えるにしたがって、読者層も広がってきている。長篇小説のなかでは、翻訳の回数に比例し、かつ叙事文学としての面白さも加わり、『ブッデンブローク家の人びと』が最も多くの読者を獲得している。

一方作品研究の方に目を転ずれば、一般の読書傾向とは異なり、マン最期の長篇小説『ファウストゥス博士』（*Doktor Faustus*）と『魔の山』に関する研究が、数のうえでは圧倒的に他を引き離している。この事実は、当該作品が含んでいる問題の多様性とそれへの種々のアプローチ方法の可能性とが、ゲルマニストを挑発することを考えれば、当然と言えよう。殊に1947年に出版された『ファウストゥス博士』の研究が27年間に示す57件という数は、30か国語以上の言語で著された『ファウストゥス博士』研究文献総数のほぼ十分の一にも当たっている。

1952年８月11日ザルツブルクのモーツァルテーウムで行われた『芸術家と社会』（*Der Künstler und die Gesellschaft*）と題する講演で、マンは次のように語っている。

「芸術は生を精神的に活気づけるために作られたのであって、生に対してニヒリズムという冷たい悪魔の拳をつきつけることはしない。芸術は善に結びついており、その根底には、叡智に近い、むしろ愛のほうにいっそう近い善意があるのである。芸術は好んで人々を笑いにさそうが、芸術のもたらす笑いは嘲笑ではなくて、明朗な笑いであり、憎しみも愚かさもそのなかでは解消し、人は解放され結合されるのである。［中略］芸術は力ではなくて、慰めであるにすぎない。それでいて——芸術はきわめて深刻な真面目さの遊びであり、完成へのあらゆる努力の模範であって、初めから人類に道連れとして与えられているものである。そして人類は罪に曇らされた目を、芸術の純潔さからそらしてしまうことは、決してできないであろう。」（西田越郎訳）

この精神を最も良く具現している作品と言える『詐欺師フェーリクス・クルルの告白、回想録の第一部』（*Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull. Der Memoiren erster Teil*）は、図らずもマン最後の創作となったわけだが、まだほとんど読まれておらず、その研究論文の数も同様に少ない。我々の課題は、決して尽きることはない。

［付記］

本小論は、筆者が大阪経済法科大学総合科学研究所年報第13号（1994年３月）にドイツ語で発表した論文 Die Thomas Mann-Rezeption in Japan ——Im Spiegel der Forschung und der Übersetzung seiner Dichtung bis zu seinem 100. Geburtstag——を参考にして書き下ろしたものである。

参考資料

A．1960年までに５度以上翻訳されたマンの小説作品とその頻度

トーニオ・クレーゲル：12
小男フリーデマン氏：８
ブッデンブローク家の人びと：８
魔の山：８
マーリオと魔術師：７
幸福への意志：６
トビーアス・ミンダーニッケル：６
ヴェニスに死す：６
衣裳戸棚：６
道化師：５
ルイースヒェン：５
トリスタン：５
予言者の家で：５
鉄道事故：５

B．マンの小説作品に関して、第二次世界大戦後1974年までに発表された研究文献の数（作品発表年代順）

ブッデンブローク家の人びと以前の諸短篇：11
ブッデンブローク家の人びと：18
トリスタン：5
トーニオ・クレーゲル：15
フィオレンツア:7
生みの悩み：3
ヴェルズングの血：5
大公殿下：10
なぐり合い：1
ヴェニスに死す：21
主人と犬：1
魔の山：47
無秩序と幼い悩み：3
マーリオと魔術師：14
ヨーゼフとその兄弟たち：27
ヴァイマルのロッテ：8
すげかえられた首：5
十戒：6
ファウストゥス博士：57
選ばれし人：8
欺かれた女：5
フェーリクス・クルル：11

C．本小論で扱った期間中のマン研究文献の数

Ⅰ．第二次世界大戦前（1904年〜1932年）

1904：1　1910：1　1911：1　1922：1
1928：1　1930：2　1931：2　1932：6

Ⅱ．第三帝国時代（1933年〜1945年）

1）第一期（1933年〜1940年）

1933：5　1934：16　1935：7　1936：6
1937：6　1938：2　1939：7　1940：3

2）第二期（1941年〜1945年）

1941：7　1944：2

Ⅲ．第二次世界大戦後（1946年〜1974年）

1946：12　1947：18　1948：32　1949：49
1950：10　1951：18　1952：10　1953：11
1954：18　1955：38　1956：16　1957：23
1958：21　1959：13　1960：20　1961：12
1962：19　1963：21　1964：13　1965：15
1966：26　1967：21　1968：23　1969：19
1970：20　1971：18　1972：18　1973：24
1974：6

D．マンの小説作品の翻訳出版の数（1910年～1959年）

Ⅰ．第二次世界大戦前

1910：2（『幻滅』と『衣裳戸棚』——初の翻訳）
1925：1
1927：19
1928：1
1929：1
1930：9
1931：1（『ブッデンブローク家の人びと』——初の長篇翻訳）
1932：1

Ⅱ．第三帝国時代

1）第一期

1933：1	1934：4	1935：14	1936：1
1937：1	1938：2	1939：3	

2）第二期

1941：15

Ⅲ．第二次世界大戦後

1946：1	1947：1	1948：2	1949：24
1950：1	1951：8	1952：7	1953：17
1954：7	1955：6	1956：2	1958：3
1959：11			

1972：『トーマス・マン全集』（全12巻、別巻1、新潮社）——我が国初の翻訳全集

参考文献目録

1．Murata Tsunekazu : Thomas Mann in Japan.——eine bibliographische Skizze——In: Doitsu Bungaku, Nr.24, 1960, S.48-56.
2．吉田次郎、下程息：トーマス・マン論攷。日独文化研究所「紀要」Ⅱ 1966年。
3．Harry Matter : Die Literatur über Thomas Mann. Eine Bibliographie 1898-1969. —Berlin und Weimar: Aufbau 1972.
4．川東祥剛：日本におけるトーマス・マン研究文献目録（1955-1974）。大阪府立大学独仏文学研究会「独仏文学」8 1974年。68-111ページ。
5．吉田次郎、下程息：日本におけるトーマス・マンの研究書誌Ⅰ・Ⅱ（1928-1974）。

日本独文学会「ドイツ文学」54・55号 1975年。

6. 小林佳世子：日本におけるトーマス・マン。ワイマル友の会「研究報告」1 1976年。3-37ページ。

7. Murata Tsunekazu : Thomas Mann in Japan. In: Thomas Mann 1875-1975. Vorträge in München, Zürich, Lübeck. —Frankfurt am Main: S.Fischer 1977, S.434-446.

8. 村田経和：トーマス・マン。—東京、清水書院 1991年。163-196ページ。